保育の現場から

「つなげたい」という思い

渡邊満美

「保健室は、癒しの場」。そう言われることに、私は疑問を感じたり、そうありたいと思ったり、どうしてなのかと考えたりする。子どもたちとつくりだす空間がそのような空間なのだろうか、子どもたちにとってそうなのだろうか、と考える。私が癒しという言葉でイメージすることと自分のやっていることに、なんだか違和感をもつ。

＊

よく保健室に来ている子どものことで、担任の先生と話していた時、「保健室にいたのを知っていたから、任せきりだった。戻ってきた時の受け入れをきちんとやっていなかったことと、クラスの中に関係をつくれなかったことと関係するかもしれない」と話す。それを聴いて、私は、はっとした。いつも感じていることなのに、改めて感じた（任せてもらっている。だとしたら、私は何を任されていたのだろうか。先生たちは何を任せていてくれたのだろうか）。考えさせられた。

私は、保健室の役割を考えていた。保健室は、そこで自分を立て直したり、そこで元気になれたりするだけの役割ではいけない。その元気が、他でも活かせるもとになったり、元気になれる場があるから何があっても大丈

夫となれたり、元気になれる場は自分の気持ちしだいで、どこででも変えられることがあることを知ったり。保健室が居場所になることがあっても、それが次にある自分の生活につながるものでなくてはいけない。保健室が終わりではなく、そこでのかかわり、そこで得た安心感がその次につながるものでなくてはいけなかった。私はそれを少し忘れていたように思った。

*

私が初めて養護教諭になった時のこと。初めての職場は小学校。新学期、「それでは新しい先生の紹介です」と当たり前のように子どもたちの前で紹介された。私は何と言っていいのかわからないながらも、「これからよろしくお願いします。みなさんと仲良くなりたいので、ぜひ保健室にも顔を見せに来てください」と話した。あいさつが終わり、保健室に戻るとすぐに主事先生から一言「あれじゃ、保健室にたくさんの子どもたちが来てしまうよ」と。ダメじゃないかと言われたように聞こえた。聞こえたのではなく、ダメじゃないかと言われたのだった。

そして、休み時間にひとりの子どもが来た。主事先生の言葉どおり来たのだった。私はこれか…と思った。私は「どうしたの?」と迎え入れた。一瞬、子どもの動きは止まり、間があった。私はそこで初めて言ってしまったことに気づいた。でも、彼はおくせずに「顔を見せに来たよ」と笑って言ってくれた。私は自分の言ってしまった言葉に、責任をもっていなかったことに気づかされた。そこから、彼との出会いのしきりなおし、「こんにちは、わたなべ まみです。よろしくお願いします」と言う。彼は、にこにこしながら「顔を見せに来たんだ」と言ってくれる。「そうね、よく見せてください。そして、先生のもよく見ていってね」と笑って、少しの時間を過ごした。彼がそのまま帰っていたら…そして、彼がもし一瞬でも間をとらなかったら…。

その日、たくさん子どもが来ることはなかった。しかし、「子どもが保健室にたまりすぎではないだろうか」と心配されてしまうほど、子どもが来るようになってい

た。子どもたちが教室に戻り、一段落すると、時々「あれじゃ、たくさんの子どもたちが来てしまうよ」の言葉を思い出していた。でも、今の私がこの時を思い出すたびに忘れられず、大切にしたいことは、先生の言葉ではない。最初に保健室に来た彼が、私の言葉で間をとった気持ちと、「どうしたの」という言葉が、私の心持ちでいろいろな意味になることだった。「どうしたの」は、ある時は受け入れる言葉。しかし、ある時は拒否する言葉のようにもなる。彼にとって、私のあの言葉は拒否しているように聞こえたのではないだろうか。私の中に「あれじゃ、たくさんの子どもたちが来てしまうよ」という言葉が残り、最初に来た子どもへの対応に出てしまったのだと思う。

次の日、また彼は、顔を見せに来てくれた。そして、またあいさつをした。私はあの時を、彼に支えられたのだと思う。そして、彼が教えてくれた。言葉にしなくても、思いがあることを。

＊

三年生の宿泊学習、大変と言われるのは夜だった。この日は雨、畳の部屋でみんなが寝袋で寝る。この宿泊は、災害時を少し意識した宿泊行事だったため、寝袋を使用して教師も子どもも寝た。寝袋は事前に自宅で干したとはいえ、学校からの貸し出しのもの。その他、いろいろな状況を合わせても、そのような環境で寝れば、喘息をもっている子どもは咳が出ても当然。その夜、一晩咳が出て止まらない子どもがいた。やっと眠ったころ、私も眠りにつく。そしてまた、子どもが咳き込む、私も起きる。夜中その繰り返しだった。そこで初めて喘息の大変さ、家族の心配、そして、その子の抱えたものを感じた。ここで、私がしなければいけなかったことは何だったのだろうか。一緒に寝ずについていることのほかにあったように思う。どんな経験であれ、この経験が次につながるようにかかわらなくてはいけなかった。

＊

ある行事、校長先生と一緒になる。校長先生は、私にこんな質問をした。「学校に養護教諭がひとりとはい

え、全部の行事に出ていて、大変じゃないかしら？」小学校の行事は、遠足のように一日で終わるものばかりではない。高学年になれば二泊三泊と宿泊の行事もある。そして、宿泊だからこそ、養護教諭にいてほしいと思うこともあった。宿泊行事は、確かに大変といえば大変。しかし、宿泊行事では、いつも保健室で出会う子どもたちの顔とは違う顔を見ることができた。私は、それをとても楽しいと感じていた。私は、その思いと「普段の子どもの姿を見ないと、具合が悪くなった子どもたちの顔や気持ちを見てもわからないことがあって…」と答えた。すると校長先生は、「たくさんのものを見て、そこで見極めるのね。それは、目利きと同じかもしれないわね。良い骨董師がすることと似ているわ。良い骨董師は、良いものも悪いものも、たくさんのものを見て、自分の目を養うらしいわ。大切なことね」と言った。

私は、その時、「あれじゃ…」と言われたことを思い出していた。その言葉に縛られ、思うように動けずにいたが、少しは自分らしくやってもいいのかもしれないと思うようになれた。それぞれの先生が伝えてくれた言葉をつなげ、考えていた。

しかし、今の私が聴くと、いろいろな意味が含まれていたと感じる。校長先生は、あの時の私に、これからも頑張りなさいと言ったのだろう。そして、子どもたちを見る本当の目を養いなさいということだったのだろう。たくさんの子どもたちと出会うほどにそれを感じる。私はまだまだ、子どもたちのいろいろな面を見なくてはいけない。そして、「あれじゃ、たくさんの子どもたちが来てしまうよ」の言葉も、私には大切な言葉になっている。保健室にたくさんの子どもたちがいると、本当に保健室を必要とした子どもが来られないときがある。自分の思いを出せる子どもたちの流れで保健室の雰囲気ができると、一方では、保健室が来にくい場となることがある。けれど、元気な子どもたちも、この空間を必要としているときはある。だからこそ、たくさんの子どもたちが来ているときには、しっかりと子どもたちを見つめ、そこでつくりだす雰囲気を意識し、その場を一緒につ

くっていくことを大切にしている。保健室はひとが来られない（いない）場では、来たいひとも来られない。しかし、いすぎてもまた、来られない空間になると思うのだ。

今の私には、どちらも大切な言葉となっている。

＊

あるきっかけから、障がいをもつ子どもたちと、共に過ごす経験をさせてもらっている。その場でのこと。

一週間前に、風邪をひいて体調を崩していた私は、まだ本調子でなかった。しかし、体調も戻ってきていたし、子どもたちと出会う元気はあると思い、その日も一緒に過ごしていた。その日、A夫は、体調が悪いことのほかにもいろいろなことが重なり、元気がなかった。まだお迎えの時間でもないのに「かえるよ、かえるの」と言っていた。自分の中の気持ちをどうしてよいかわからないことから、気持ちを表現した言葉だったのではないだろうか。A夫は「もうかえるの。さむい」と言った。眠ってしまいそうな感じもあり、タオルを掛け、少し抱いて過ごしていた。すると不思議なことが起こった。自分の中の体調の悪い部分が引き出されてきた。A夫を抱いているだけで一緒に引き込まれていく感じがした。といっても、その感覚をその時わかってはいなかった。A夫を抱いていた時は、A夫の体調の悪さ・気持ちを立て直したいと思っていた。しかし、あとから考えても、ほかの人から見ても、私も具合が悪そうに見えたとのことだった。私は実際その時どうだったのか…。あまり記憶がない。ということは、まわりが見えてなかったのだと思う。一時間ぐらいそのような時間を過ごし、A夫はまた遊び始めた。お母さんがお迎えにきた時、「今日はちょっとごろごろしていました」と話すと、「朝早かったからかな」と言う。

あとから私が一番感じたことは波長。A夫の出す波長にいつもどおり、合わせようとした。元気な時とは違い、私の波長がA夫に引き込まれていくようだった。な

んだか当たり前のようだが、不思議な体験をした気がした。

この場で過ごし、子どもたちとのかかわりを振り返ると、自分のもつ波長と相手のもつ波長が重なり合う時を、からだの感覚として気づかせてくれる。そして、重なり合う時が、つながる時だということも感じている。

＊

先日、卒園した子どものお母さんに会った。話していると、「実は幼稚園で、ぶつけた時にもらった氷がまだうちの冷凍庫にあるんです」。そして、「時々使っては、とっといて、と言うんです」。私は「なんて…」と思った。幼稚園で養護教諭をしていて一番感じることは、子どもたちは、私は何でも治してくれるひとと思っていること。でも、これも、私がしていることだけではなく、子どもとかかわるひとたちがつないでくれているのだと感じる。家に帰れば、お母さんが、子どもの思いをつないでくれているのだろう。「先生はそう言ったかもしれないけど…」と、子どもの言っていることを否定することもできる。子どもの思いを尊重し、まわりがつないでくれているから、私は私ですべきことにきちんと向き合わなくてはいけないと思える。そして、それぞれの思いに応えたいと思うことができる。

＊

私の中に「癒し」は、どこか「治療」や「治す」ことに主が置かれ、その場のことで、その先を見据えたものでないように感じているのかもしれない。

子どもたちには、自分が自分でいられる場所を見つけること、自分が自分でいることを否定しないでいられること、自分が気持ち良いと思える感覚を感じられるよう育ってほしい。呼ばれ方が何であれ、子どもたちが保健室を「いま」の居場所として選んだことを受け止め、かかわる大人が次の生活につなげることが大切なのだと感じている。そして、保健室は、つなげることを意識しなければ、子どもたちが育っていく場とはなりにくい場、であるように思う。

（お茶の水女子大学附属幼稚園）